

Mランドニュース Vol. 100

丹波ささ山校 平成27年7月1日発行

発行 (株)篠山自動車教習所 〒669-2436 兵庫県篠山市池上569
TEL. 079-552-0815 FAX. 079-552-3940 発行責任者 井本 徹
<http://www.sasayama-ds.com/> E-mail info@sasayama-ds.com

《今月の言葉》

成長は苦しさに比例する。苦しさを楽しさに変えるのは、心のギアチェンジ。「この挑戦で自分は成長できる」と思えば、それは楽しみに変わる

(株)タニサケ 松岡 浩 会長
みやざき中央新聞

四月十三日付 取材ノートより

お茶席に学ぶ

篠山自動車教習所が、Mランド丹波ささ山校となつて今年で十年を迎えました。Mランドではあいさつをルーとして、三種の神器（掃除・お茶・はがき）をゲストと共に取り組んでおりますが、十周年という節目にあたって私たち職員が原点にもどり、譲り合いや思いやり、気付き心をお茶席から学び、ゲストに伝えられないかと思ひ「お茶席研修」を計画しました。

この研修をMランドお茶席「三宝庵」でご指導いただいている満仲弘恵先生にご相談しましたところ、「歩々清風起」（禅語）という言葉をいただきました。「一歩一歩の歩みの後に爽やかな風が吹く」という意味ですが、あゆみ方によっては荒い風となり塵も舞います。塵の無い清らかな心を持ってお茶を学ぶことにより、爽やかな風が受けられるようになることとはとても良いことですね」と、こころよく引き受けていただきました。

研修は満仲先生自坊の正

覚寺において、六月一日から三日間、三十三名が五つの班に分かれて行いました。お寺の庭は、作庭家で枯山水の祖といわれた重森三玲氏が昭和四十五年に造られたもので、その庭が一望できる客室に通じていただき、当時、傍らで重森氏が造るようすをご覧になった満仲先生より庭の説明をしていただきました。



静かな庭を拝見

池の周りには八十八個の護岸の石組みがなされ、鶴と亀の縁起物だけでなく、滝には鯉の滝登りを石で見事に表現されており、その造りは大雨による裏山の土砂流出にもゆるぐこともなく、一流人の技に驚くばかりです。さらに驚いたことは、満仲先生の先代が篠山の住吉神社に寄進されたことに感銘を受けた重森氏が、無償でこの庭を造られたということでした。心には心で応え、人のために良いと思ったこと

は進んでする尊さを、この庭から学びました。

つづいて数寄屋（茶室）建築の第一人者、中村昌生氏が昭和五十七年に造られたお茶室に入らせていただきました。お茶室においては誰もが平等なのですが、小さなお茶室の中でも正客（主となるお客様）と次客、お詰め（最後に入るお客様）の客座があり、お点前する座との天井を素材や形で分け、もてなす側としての気配りがなされた造りであることを知りました。



お点前のご指導中！

お茶の作法についても丁寧に教えていただきました。特に印象に残っていることは、「お先に」、「お点前頂戴いたします」、「ご相伴させていただけます」などの人への気配りや感謝の気持ち、そして、一つひとつ由来のある道具を大切に作る心でした。私たちの仕事においても、大切な心がお茶室という世界の中

にあったことに気付かされました。

庭、お茶室ともに教えていただければ分からないことばかりで、何事においても興味を持ち、自分で見て、体で感じるのが貴重な学びであると感じました。この研修で学んだ日本伝統の心をもとに、より上を目指したMランド創りをしてまいります。ありがとうございます。

研修チーム 永見 倫幸
※このお茶室、お庭を見学希望の方は、Mランドまでご連絡ください。

一〇〇キロを歩く

Mランド益田校で六月十三日から二日間、私も過去に参加した日本一過酷といわれる中国山脈横断一〇〇キロウォークに、今年も丹波ささ山校の卒業生 岸本雄也さんが参加されました。岸本さんは今回五回目の参加となり、通算五〇〇キロという途方もない距離を歩いたことになりました。また、一〇〇キロを歩くのも並大抵のことではないのに、なんと岸本さんは三回目の挑戦の

時から、「ゴミを拾いながら歩く」と、誰も考えつかないようなルールを自分の中でつくり、以降実行されているのです。



今年も楽しく完歩

この姿がどれくらいの人に感動を与えていることでしょうか。二日目、参加者二百八十二名中三十六位、十八時間四十八分で完歩された岸本さんに「どうでしたか？」と聞くと、「すべて上手くいききました。天候も良く夜空の美しさに感動し、自然と一体になれました。また、みなさんの心配りにも助けられました」と仰いました。今回はスタッフとして参加させていただきましたが、苦痛や苦難を乗り越え歩く一人ひとりにドラマがあり、そんな皆さんをサポートする側でないと分からないことがたくさんありました。人が自分と向き合うがんばる姿を見るのができる、素晴らしい経験をさせていただいたことに感謝します。 岸恒三郎

切磋琢磨

六月二十六日、Mランド益田校において、「株式会社そうじの力」が全国でご支援されている企業のうち、十四社による合同研修会が二日間に渡り開催されました。初日は益田市内三社の見学で、まずMランド益田校の改善された車両整備場と二輪教習棟を見学しました。

改善前との変わり様は職員の工夫と努力、熱意が伝わってくるものでした。

つづいて見学したのは島根県西部で多くのバス路線を有する石見交通で、当時、社屋を建築するにあたり地元で建設できる業者がなく、大阪の建設会社によって施工された築六十年にもなるバス整備場と、本社事務所を見せていただきました。整備場では改善前の記録パネルとの比較により、二年もの間、社員一丸となって行われた改善作業に感動で胸が熱くなりました。年月を経た建物でありながら、整頓や清掃が行き届いた整備場には、さわやかな空気が流れていました。



改善前のパネルと比較

三か所目は、地域で広範囲にお弁当や仕出しを調理し配達されている、益田クッキングフーズです。株式会社そうじの力、小早祥一郎氏のご指導のもと、社員の方々が改善に費やされた努力は、異業種の私たちにとても「よくぞ、ここまで！」と刺激を受けるものでした。



改善前の状態です

二日目は多種にわたる企業の取り組み発表で、いずれも改善に至るまでの問題点や課題はあるものの、環境面やそこで働く人におよぼす影響は計り知れないものがありました。さて、さき山校もどのようにな変わっていくのでしょうか！

井本 徹

お帰りなさい！

六月二十日(日)、この春高校を卒業されたゲストをお誘いして、「フチ同窓会」を開催しました。免許を取ればまず来ることのない教習所に、ふたたびお越しただけの幸せを感じます。ともあれ、お食事をとバーベキューをご用意、お互いの近況や運転のドキリ体験で、終始笑顔のたえない時間を過ごしました。

このあとがMランド同窓会の本番です！やさしい(?)インストラクターがセッティングした、カンニング不可能の「ガチンコ駐車大会」のはじまりです。教習時とおなじように、「シートベルトをしてください」と言ってくれるゲストもあれば、緊張のあまり自らシートベルト忘れるゲストも。また、一口に駐車といっても前進で、あるいは後退でゲストによって方法は千差万別でした。



「これは難しい！」

一人ひとりの運転を見ていて、一生つづけていく運転を「教習」という限られた時間のなかで、一生、心に響くことを伝えていく大切さを再確認できました。「一生無事故・無違反」は勿論、思いやりの気持ちで運転できる「心のドライバー」を、ゲストと共に創造するMランドになるよう今を全力で頑張ります。

YES WE CAN!
営業チームリーダー 中野 聡

行ってきました！

六月二十八日、滋賀県彦根市で行われた、「第六回日本を美しくする会・関西ブロック大会」二日目の掃除実習に参加してきました。

午前六時三十分、会場となった県立彦根東高等学校には、各地から約三百名もの方々が、これから始まる「掃除」に期待のごようすで集まっておられました。国宝彦根城周辺のトイレを十一班に分かれ、私は十二名の方と観光センターの駐車場のトイレを磨かせていただきました。いつもと違うトイレと

初めて会うメンバーですから、相談と協力が欠かせません。そのような中だからこそお互いを思いやる雰囲気がいざんと生まれるのです。

閉会式では、シンガポールから日本へ企業研修に来られている男性が、「素手で便器をつかんだとき、心の壁を越えられたように感じた。道具を丁寧に使うことの大切さを知りました」と、十名の方と共に感想発表されました。

「日本を美しくする会」相談役 鍵山秀三郎氏から「世界中の人が思いやりを持って、戦争など起こることはありません。でも、今の世界はそうはなっていません。悲しいことです。少しでもいい世の中にしていきましょう」とお話しされました。



優しく語られる鍵山相談役

ここに、「よくしていこう」という思いで、これだけ多くの方が集まりました。私も

篠山でさらに掃除の輪を広げる思いで帰途につきました。

井本 徹

『掃除に学ぶ会』のご案内

私たちと一緒にトイレを掃除しましょう。

7/12(日) 八上小学校 東トイレ
(Am8:00~9:00)

7/19(日) 篠山中学校 運動場トイレ
(Am8:00~9:00)

※参加していただける方は井本までご連絡ください。

編集後記

六月、私たちはお茶席研修、百キロウォーク、そうじの力、「日本を美しくする会」関西ブロック大会と様々な研修をさせていただきました。自らの力としてきました。

しかし、その裏では私たちを迎えるために、貴重な時間と大変な労力をスタッフの皆様におかけしたことも忘れることはできず、私たちはそれにお応えしていく仕事をしなければなりません。

(徹)